『千葉大学　ユーラシア言語文化論集』17（2015）：15 － 29

結果構文におけるプロファイルの定着パタンの変動
－成分構造の卓立性と合成構造の分析可能性

楊明

キーワード: 合成構造　　成分構造　　定着効果　　分析可能性　　文法構文

1.　構文スキーマ

Langacker(1987:466,2009:231)によると、認知文法の基本的な考えの一つとして、合成は範疇化(categorization)の複雑なタイプである。文法構文は構文スキーマの形式を取り、対応関係(correspondence)と範疇化関係(categorizing relationship)によって結ばれた記号構造の集合体として定義される。つまり、事例化表現(instantiating expression)から抽出された共通点を表す抽象的な記号集合体(schematized symbolic assembly)である。構文スキーマは、単純な表現同士がどのように合成してより複雑な表現を形成していくかを規定するものであり、新しい表現の形成を導くテンプレートになるのみならず、その表現に関係する側面を範疇化する役割も果たす。Langacker(2009:236)は図 1 のように示している。

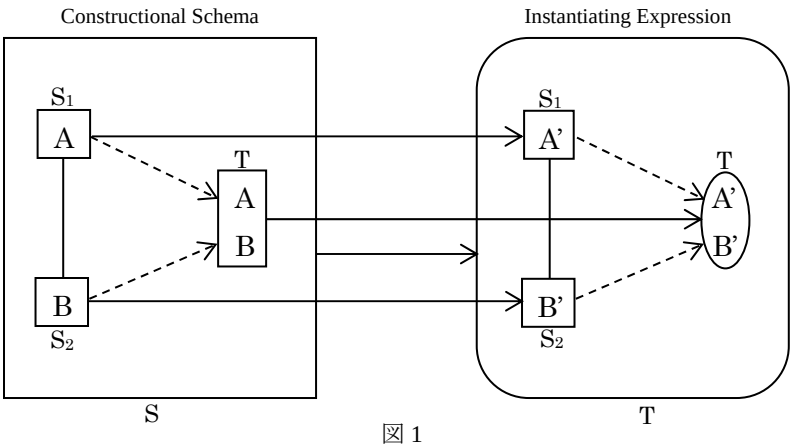

図 1

図 1 の左側の四角い枠に示されるように、構文スキーマには対応関係と範疇化関係によって結ばれる成分構造と合成構造が含まれる。更に、左側の面取枠に示されるのは構文スキーマの対応関係と範疇化関係に基づいて新しい事例化表現が構築されるプロセスである。ここで二つのレベルにおける範疇化関係が仮定されている。一つは構

文スキーマや事例化表現の中に存在する範疇化関係である。もう一つは構文スキーマと事例化表現の間に存在する範疇化関係である。範疇化関係にある基準と目標はそれぞれ S と T で示されている。

その内部をみると、構文スキーマは合成概念を理解するための二つの成分構造[A]と[B]を指定する。[A]と[B]を繋ぐ線は合成構造を形成するための両者の統合を表す。右側の新しい表現では、成分構造の[A’]と[B’]はスキーマによって指定された方法で統合される。合成構造[[A’][B’]]c は、[[A][B]]c が[A]と[B]に関連付けられる場合と同じ方法で、[A’]と[B’]に関連付けられる。実線の矢印は新しい表現のスキーマによる範疇化を指示する。つまり、構文スキーマの事例化表現として認識されるということである。新しい表現としての([A’][B’])は言語ユニットとして定着(entrench)していないので、楕円又は丸括弧で示される。全体的には、新しい表現(T)はスキーマ S に対して精緻化関係を担っている。従って、構文スキーマは新しい表現の中に内在している。([A’][B’])は、左側に示される構文スキーマからも右側に示される[A’]と[B’]からも意味的な貢献を受ける。

2. [[V][R]]c の構文スキーマ

中国語の結果構文(武松打死了老虎)には、合成構造[[V][R]]c が述語として存在する。この[[V][R]]c には、活動事象を表す動詞[V]が先行し状態変化事象を表す非対格自動詞[R]が後続するという特定の合成パタンが見られる。楊明(2008,2013)によると、[[V][R]]c という合成構造は、成分構造の[V]と[R]に還元できない意味があるといったゲシュタルト効果が強く、行為連鎖(action chain/Langacker1991:283)又は因果連鎖(causal chain/Croft2012:209)の概念を記号化し、抽象的な認知ドメインとして喚起する構文スキーマ(constructional schema)である。ここの行為連鎖は、動作主(A)と被動者(P)の力動的関係(force-dynamic relationship)とそれによる被動者の状態変化から構成される。動作主(A)と被動者(P)はそれぞれ行為連鎖の先頭と末尾になる。力動的関係と状態変化は、それぞれ特定の[V]と[R]に結びつく概念的内容(conceptual content)又は意味フレーム(semantic frame)によって具体化される。更に、[[V][R]]c は他動構文[SVO]において抽象的な使役変化事象をプロファイルする。構文スキーマの意味極を図 2 のように図式化ができる。

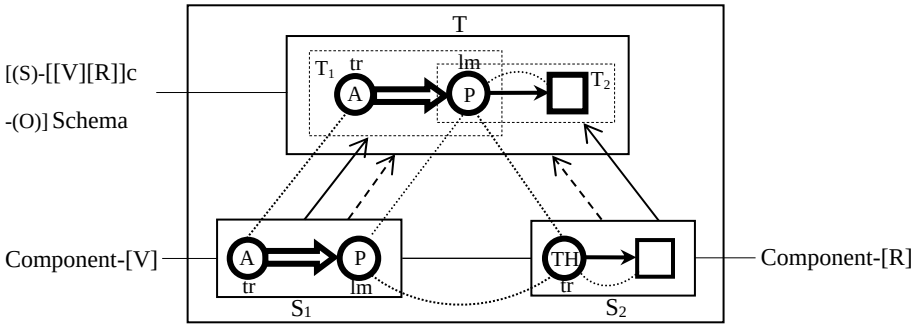

図 2

上段の[[V]-[R]]c Schema というボックスは他動構文における合成構造[[V][R]]c の意味構造である。下段の Component-[V]と Component-[R]はそれぞれ成分構造の[V]と[R]の意味構造を示す。[V]は他動的な活動事象をプロファイルし、[R]は TH(変化主体)の自立的な状態変化事象をプロファイルする。具体例の「武松打死了老虎」では、「打」と「死」は[V]と[R]にそれぞれ対応する。

図中の点線は語彙と構文という二つのレベルの各関係でプロファイルされる参与者が同一物であることを示す対応線である。そして、[V]と[R]を繋ぐ実線は構文スキーマが成分構造の概念的内容がどのように統合し合成構造を形成するかを指定するものである。これが構文スキーマの機能･意味的な貢献である。というのは、合成構造の意味は成分構造がどう統合されるかによって決まるからである。それには成分構造には存在しないような対応関係やプロファイルの変更などが含まれる。例えば、[R]の TH は合成構造[[V][R]]c のレベルでは被動者(P)として捉えられるようになり、同時に[R]が表す自立的な変化も使役の結果変化に変わる。

点線の枠は基準 S_1 と S_2 によって範疇化される目標全体 T に属する複数の側面、つまり局所目標の T_1 と T_2 を表す。T_1 と T_2 は行為連鎖においてそれぞれ原因事象と結果事象である。基準 S_1 から局所目標 T_1 に向かう実線の矢印は[V]が[[V][R]]c における[V]を範疇化することを示す。S_2 から T_2(右側の点線の枠)に向かう実線の矢印は[R]が[[V][R]]c における[R]を範疇化することを示す。この場合、S_1 と S_2 は目標全体 T を理解するための基準として喚起され、それぞれ目標全体のある部分のみを評価するので、S_1/S_2 と目標全体 T の間の範疇化関係は点線の矢印で示す。これは、Langacker(2009:228-230)でいう複雑認識(complex recognition)の場合である。

3.　述語動詞と項構造構文

Langacker(1987,1991,1995,2008,2009)によると、[[V][R]]c のような構文スキーマと語彙は、記号的な連続体をなしており、具体性の程度が異なるにせよ、本質的に同質である。つまり、[[V][R]]c という構文スキーマのプロファイル(厳密には construal)は動詞と平行性がある。Croft(2012)では、認知類型論の視点から、動詞のプロファイルと呼ばれるものは必ず特定の項構造構文において定義されるものであるとし、具体的に次のように指摘している。

Just as a verb in a tense-aspect construction profile certain contiguous phases of the aspectual contour of the event, a verb in an argument structure construction profiles certain contiguous segments of the causal chain of the event. Although I will describe the profile as the verbal profile, it should be remembered that the profiled segment of the causal structure represents the semantics of a verb in a particular argument construction.　　Croft(2012:206)

この意味では、抽象的な項構造構文は述語によって喚起される意味フレーム(概念的内容)をベースにして特定のプロファイルを押し付けていくような概念化者の事態把握の仕方を反映するもので。Langacker(2009:248)でも、ある語彙が使われる文法構文による事態把握はその語彙の文法カテゴリーの決定と切り離せない関係にあるとし、次のように述べている。

Given an array of content (such as the cooking scenario), a lexeme's grammatical category depends on how that content is construed, notably in term of profiling and trajectory/landmark alignment. What this means in practice is that category membership is indissociable from use in grammatical constructions. Being schematic in regard to content, the conceptual import of grammar consists primarily in the construal it imposes.　　Langacker(2009:248)

本稿は Croft(2012)や Langacker(2009)に賛同する立場にある。[[V][R]]c という構文スキーマは行為連鎖又は因果連鎖を喚起する。喚起された行為連鎖はどうのようにプロファイルされるか、どのように把握されるかは、[[V][R]]c が述語としてどのような項構造構文と統合するかによって決まると考える。

4. [[V][R]]c と[SVO]との統合

Langacker(1987:310)によると、合成階層性(hierarchy)は人間認知の基本である。認知的処理は複数レベルの構成があり、あるレベルで成分構造が統合して形成される合成構造は、より高いレベルでまた単体(unitary entity)として新たな合成構造を作っていく。

ユニット状態の[V]と[R]が統合して構成される合成構造の[[V][R]]c は、より高いレベルで述語として他動構文[SVO]と統合して、(S-[[V][R]]c-O)という節レベルで使役事象をプロファイルする。この場合、合成構造(S-[[V][R]]c-O)は、既成の概念ユニット(prepackaged conceptual unit)ではなく、新しい表現である。つまり、話し手が成分構造を操作して自ら作り上げた表現であり、話し手が[SVO]と[[V][R]]c という成分構造の存在を認識し、それが合成構造の意味に貢献していることを認識する程度が相対的に高い。そのため、分析可能性(analyzability)が強く、成分構造[SVO]と[[V][R]]c は高度に活性化され、強い卓立性(prominence)を持っている。両者の統合は図 3 のように示すことができる。

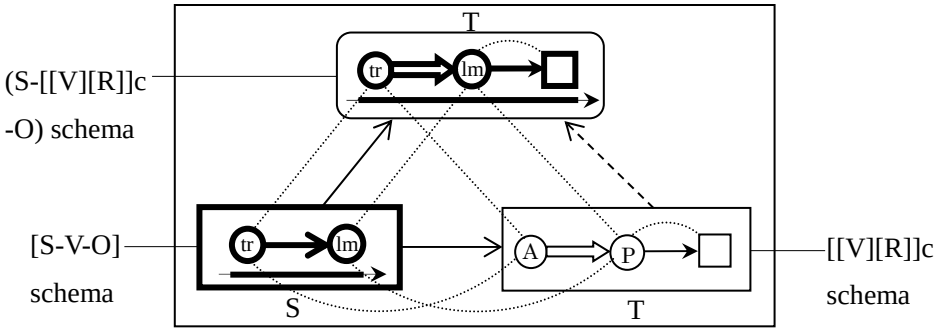

図 3

図 3 では、左下の[SVO] schema は、他動構文の意味極であり、二つの参与者の間に何らかの非対称的関係をプロファイルする。非対称関係の先頭(通常は動作主(A))は、最も卓立性を持つ tr であり、主語(S)として具現化される。関係の末尾(通常は被動者(P))は、二番目に卓立性を持つ lm であり、目的語(O)として具現化される(Langacker1991:282-329)。そして、[[V][R]]c によって喚起される行為連鎖は、より参与者が多く複雑なものであるが、ここでは、便宜のため[[V][R]]c schema で動作主(A)と被動者(P)間の力動的関係のみを示す。なお、この場合の行為連鎖は、プロファイルや tr/lm の配置に対しては中立的な状態である。

[[V][R]]c は、[SVO]と統合するためには、[SVO]から範疇化を受けることになる。つ

まり、[[V][R]]c は非対称関係の事例であることが必要である。この際に[SVO]が基準(S)であり、[[V][R]]c は目標(T)となる。[[V][R]]c が喚起する行為連鎖は、典型的には動作主(A)と被動者(P)における一方向的なエネルギー授受関係であるので、非対称的である。そのため、[[V][R]]c は、[SVO]における[V](e-site)を精緻化することになり、[SVO]に対して精緻化関係(elaboration)にある。この範疇化関係は S から T へ向かう実線の矢印で示す。[[V][R]]c と[SVO]における参与者はいずれも抽象的であるが、その対応関係を点線で示す。二つの成分構造(S/T)の内容はそれぞれ合成構造(T')に写像される。[[V][R]]c は合成構造に概念的ベースとして状態変化を含んだ行為連鎖を与える。[SVO]は合成構造にプロファイルや tr/lm の配置を与える。その結果、行為連鎖の動作主(A)と被動者(P)はそれぞれ tr と lm に対応することになる。「小张推开了门」のような文はその事例化表現になる。

この統合は本質的には拡張認識(augmentative recognition)に基づいたものである。換言すれば、[SVO]が[[V][R]]c の概念的ベースに特定の事態把握の仕方(construal)を押し付けた結果として、合成構造(S-[[V][R]]c-O)は使役事象をプロファイルすることになる。この場合、[SVO]はプロファイル決定子(profile determinant)であるので、[SVO] schema を太線のボックスで囲むことで示す。また、合成構造(S-[[V][R]]c-O)は[SVO]の一事例であるから、両者の範疇化関係も精緻化関係である。そのため、S から T'へ向かう実線の矢印で示す。一方、[[V][R]]c と合成構造はプロファイルが違うので、範疇化関係は拡張である。図 3 では T から T'へ向かう点線の矢印で示す。この段階では、[SVO]と[[V][R]]c のそれぞれの特徴を受け継いだ合成構造 T'は未定着の新しい構造であるので、ユニットの資格がなく面取り枠で囲む。

5. 分析可能性の低下

合成構造(S-[[V][R]]c-O)が高いタイプ頻度で使用されると、話し手の脳内に定着し、更に言語共同体で慣習化されるので、ユニット状態にある合成構造[S-[[V][R]]c-O]が獲得される。ユニット状態は図 4 で四角い枠で[S-[[V][R]]c-O] schema の意味極を囲むことで示す。

ユニット状態の獲得は、成分構造を活性化することなく、合成構造に直接にアクセスすることが可能になることを意味する。これは認知心理学でチャンキング(chunking)や自動化(automatization)と呼ばれる現象である(Bybee2010:34)。しかし、

Langacker(1987:297,2000:109)や Bybee(2010:36)によると、合成構造が慣習的なユニットとして定着したからといって、成分構造の卓立性が直ちに失われるのではなく、成分構造も合成構造も同時に活性化される状態が続くことが多い。そのような場合に、合成構造はある具体的表現に主要な内容を提供しており、成分構造の役割は補助的である。この状態は、4 で S と T と T'はいずれも四角い実線の枠で囲むことで示しておく。

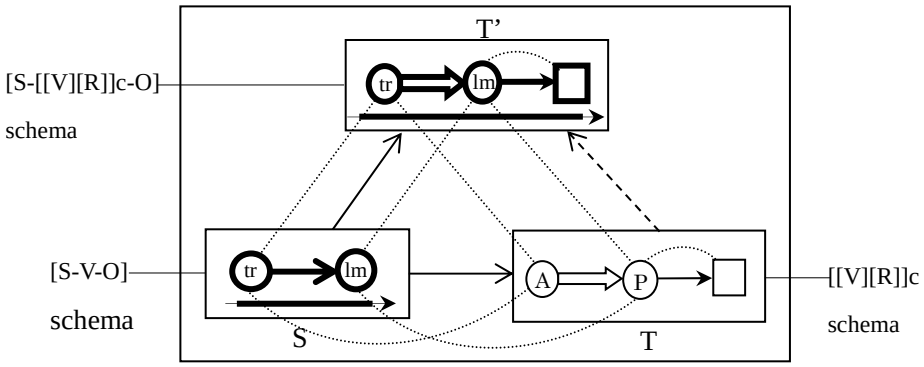

図 4

更に、合成構造[S-[[V][R]]c-O]と意味の対応が定着し慣習化されると、既成の概念ユニット(prepackaged conceptual unit)になる。そのため、合成構造の概念(T')を構築するために、成分構造(S と T)を喚起して活性化する必要がなくなる。言い換えれば、合成構造は成分構造とは独立に活性化され、直接にアクセスされる。その際に、合成構造の分析可能性が低下し、成分構造[SVO]と[[V][R]]c の卓立性も合成構造の中で低下してくる。従って、合成構造に対する成分構造の意味貢献が識別できなくなる。表記として[S-[V]-[R]-O]でこの状態を示しておく。

この際、行為連鎖の概念的内容やプロファイリングや tr/lm の配置は、図 5 が示すように、成分構造の[SVO]と[[V][R]]c から別々に与えられるよりも、[S-[V]-[R]-O]という成分構造から独立した項構造構文(argument structure construction)に決められることになる。成分構造の卓立性の低下は、図 5 で点線の枠で成分構造のスキーマを囲むことで示す。

この状態になると、[[V][R]]c という合成構造の卓立性が弱くなるので、その意味貢献も、項構造構文のレベルで無視されることになる。極端な場合に、「青草吃肥了羊儿」のように、[S-[V]-[R]-O]の力動的関係の方向性(青草⇒羊儿)は、[[V][R]]c の行為連鎖の方向性(羊儿⇒青草)に対して逆転する例も生まれ、主体性(subjectivity)が強い構文にな

る。そのため、[V]と[R]は、それぞれ項構造構文が表現する使役事象の手段(means)や前提条件(pre-condition)や結果状態(result state)を精緻化する機能を果たす(楊明2008,2013)。

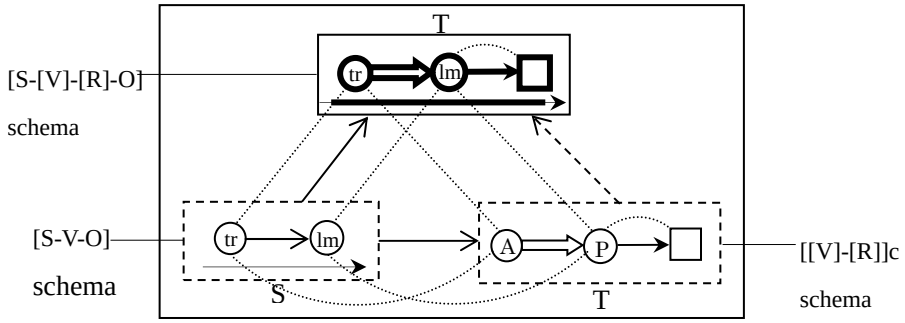

図 5

このようにみてくると、[V]と[R]から構成される合成構造[[V][R]]c は、項構造構文というより大きい文脈では、それ自体も次第に活性化されなくなるのである。同じ現象は、実は語彙意味論にも存在する。例えば、*printer* は、*print* と*-er* からなる合成構造であるが、単に *something that prints* ではなく、ある特定の種類のコンピュータの周辺機器を指す意味をより大きい文脈で獲得しているのである。このような分析可能性の低下を促進する要素の一つとして、Langacker(2000:110)が指摘するように、部分の意味から予想される合成的な意味と最終的にその表現の慣習的な値となる実際の文脈における意味との間にずれが存在することである。その意味のずれが大きいほど、[[V][R]]c への依存度が減り、項構造構文全体が独立に活性化されやすくなる。これも部分的合成性の一例として捉えられる。

しかし、[[V][R]]c の卓立性が弱くなるだけで完全に消えることはない。そのため、「青草吃肥了羊儿」のような、[[V][R]]c の意味貢献を完全に無視した文(ここでは[[V][R]]c の力動的関係の方向性(A⇒P)が無視される)は、文脈的な助けを借りなければ、不自然に感じることが多く、生産性も低い。逆に、「小孩哭醒了邻居」のように、[S-[V]-[R]-O] の力動的関係の方向性と[[V][R]]c の行為連鎖の方向性に対して逆転しない場合は、文の自然さが上がり、生産性も高い。いわば、[S-[V]-[R]-O] schema と[S-[[V][R]]c-O] schema はある種の競合関係にあると考えられる。

6. [[V][R]]c へのプロファイルの定着

Langacker(1987,2000,2009)の使用基盤モデルによると、語彙項目の特性の記述にはその語彙が慣習的に現れる構造フレーム(structural frame)についての指定が含まれる。そうした構造フレームは語彙項目の特性自体に内在し、その特性のあり方を形作る本質的なものである。語彙項目というものは、脱文脈化(de-contextualization)により現れてくる。つまり、使用事象の様々な側面のうちで繰り返し生じない部分が強化されないために消えていくことで次第に個々の具体的な使用文脈からの抽象化が行われていくことで得られるのである(Langacker2000:105)。

更に、Langacker(2009)によると、特定の項構造構文における述語のトークン頻度(token frequency)が高ければ高いほど、項構造構文レベルのプロファイルは、述語のプロファイルとして定着される可能性が高くなる。特に、動詞や構文スキーマが他動構文(SVO)や自動構文(SV)といった無標(unmarked coding)の基本ヴォイス構文で述語として高い頻度で使用される場合に、節レベルのプロファイルを述語のものとすべきか、構文のものとすべきかが必ずしも明瞭ではない(Langacker2009:248)。

[[V][R]]c は、述語として[S-[V]-[R]-O]において高いタイプ頻度(type frequency)で使用されると、節レベルのプロファイルを継承して定着させる可能性が高いと考えられる。これは、Langacker(2000:106,2009:248)で指摘されるように、他動性は節レベルの他動詞文 *Jill ate a juicy peach* にも内在しているし、その述語(動詞 *eat*)にも内在しており、語彙的意味と構文的意味はオーバーラップし、往々にして分離不可能であるという観点と軌を一にするものである。

プロファイルの定着の条件としては、次の二点が考えられる。一つ目に、合成構造の分析可能性が低下し、成分構造の意味貢献、特に項構造構文のプロファイルの出所が識別しにくくなる。二つ目には、[S-[V]-[R]-O]の力動的関係と[[V][R]]c によって喚起された行為連鎖と同じである。つまり、[S-[V]-[R]-O]の tr(主語)や lm(目的語)が[[V][R]]c の行為連鎖における動作主(A)と被動者(P)に対応するような場合である。

[[V][R]]c へのプロファイルの定着は、[[V][R]]c が、一つの動詞のように、把握時間において連続的なスキャニングによって展開されるプロセスの概念を指し示すことを意味する。この際、[[V][R]]c はプロファイル決定子、つまり節の主要部(clausal head)となる。プロファイルの定着状態は、図 6 の[[V][R]]c schema において tr/lm を含む行為連鎖を太線で示し、時間的なプロファイルは太線の矢印で示しておく。

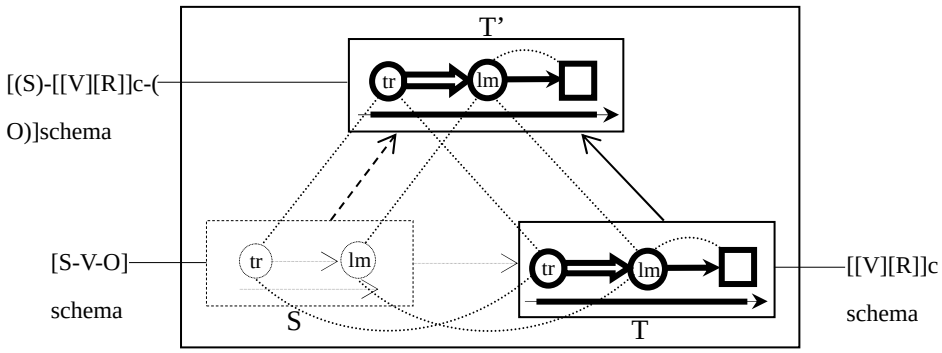

図 6

しかし、そのような状態になったとしても、[[V][R]]c が使役事象をプロファイルすると言えるのは、やはり[SVO]構文という構造フレームにおいてなのである。[SVO]構文は、卓立性が非常に弱くなるものの、決して完全に消えてなくなることはない。というのは、[[V][R]]c は、他動構文[SVO]のみならず、自動構文[SV]や把構文[S-BA-O-V]や受身構文[S-BEI-OBL-V]など、様々な構文の述語として同じ形で生産的に使われる。異なる構文では、[[V][R]]c schema は、概念的内容として異なるプロファイリングを受け、違う意味を表現するからである。このような構文依存性の状態は、[(S)-[[V][R]]c-(O)]で表記し、図 6 では[SVO] schema を細い点線で示しておく。

構造フレーム依存性があるから、[[V][R]]c の事例化表現ならすべて使役事象をプロファイルするという考えは短絡的である。定着の度合いは、一概には言えず、トークン頻度によって千差万別である。例えば、[SVO]構文における「跑远」や「走累」のトークン頻度は、「推开」や「打死」より遥かに低いので、前者より後者のほうの定着可能性が低い。また、「哭醒」のような動補構造は、他動構文（孩子哭醒了邻居）にも、自動構文（孩子哭醒了）にも生産的に使われるため、使役事象のプロファイルの定着に対して中立的である。

従って、[[V][R]]c によって喚起された行為連鎖は、[[V][R]]c が述語として様々な構文と統合したときに、概念的内容として様々な構文からそれぞれの事態把握の仕方(プロファイルや関係時間性や tr/lm の配置など)を押し付けられる(imposed)のであると考えたほうが現実に近いと思われる。当然ながら、高い使用頻度によって、[[V][R]]c へのプロファイルの定着はある程度進んでいることは否めない。これは、Croft(2012:206-207)で認知言語類型論の視点から提案された動詞のプロファイルに関す

る考え方と相容れるものである。

7.　分析可能性と[[V][R]]c の語彙化

前にも述べたように、図 2 の[[V][R]]c 構文スキーマに基づいて新しく作られた事例化表現は、成分構造の意味的貢献が十分に意識される。例えば、「降低」というような事例化表現は、最初に構築されたときに、「降」と「低」に分析することができ、十分な分析可能性があったと考えられる。しかし、同じ事例化表現は、高いトークン頻度で繰り返して使用されるうちに、ユニットとして定着してくる。

Langacker(1987:461)によると、ユニット状態自体は、合成構造の分析性に影響がない。しかし、定着の潜在的な影響は重大である。一つの影響は、成分構造の卓立性を低減させることで話し手が成分構造を一々識別する構築的な努力をする必要がなくなる。というのは、既成のルーティン(established routine)が協同して自動的な共活性化(co-activation)が起きるからである。この考え方に基づくと、「降低」における成分構造の卓立性の低減は、図 7 で示すことができる。

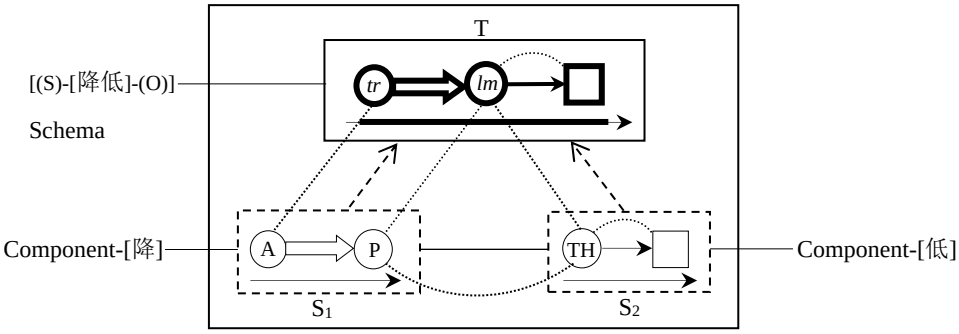

図 7

図 7 において、Component-[降]と Component-[低]の意味構造を点線で囲むことでその卓立性の低減を示し、細線でそれぞれの関係を示すことで合成構造への意味的貢献の低減を示す。例えば、「降低」を「?降不低」や「?降得低」のように少し分解しにくいことから分かるように、分析可能性が少し落ちてくる(朱德熙 1982:126 も参照)。そのため、成分構造の[降]と[低]は基準(S)としての機能も落ちてくる。同時に、合成構造も目標(T)の機能も落ちる。

しかし、ユニットとして固定した合成構造であっても、ある程度の分析可能性が保

持される。合成構造と成分構造が同時に活性化される場合は十分に考えられる。例えば、「降低产量」を「降产量」と「产量低」に分解することが可能である。だから、言語使用者にとっては、成分構造の意味的な貢献がある程度に識別することができると考えられる。

更に、Langacker(1987:462)によると、分析可能性の程度は、合成構造がその成分構造の活性化を顕在化させる確率と成分構造の卓立性の程度を反映し、あくまでも程度の問題である。「降低」と比べて、「扩大」は、分析可能性がもう少し落ちてくる。そのため、「??扩不大」や「??扩得大」という分解はより難しくなる。同時に、「扩大规模」を「*扩规模」と「规模大了」に分解することも難しくなる。つまり、成分構造の意味的な貢献が識別することが難しくなっているのである。しかし、二つの成分構造は、同時に同じ程度で卓立性を落としていくとは限らない。どちらか一方だけが卓立性を保持している例も見られる。例えば、「拓宽」や「招徕」における拘束的な形態素に比べて、話し手は「宽」と「招」の意味的貢献をより鮮明に認識できる。

最後に、分析可能性が低下すると、「摧残」のような通時的に歴史の長いものは、「*摧不残」や「*摧得残」の非文法性が示すように、成分構造を活性化する能力を完全に失ってしまい、成分構造に分解することは基本的に不可能である。また、「摧残人才」を「*摧人才」と「*人才残」に分解することは完全に不可能になる。この場合、メタファー的な用法が優勢を占め、成分構造の境目がぼやけて不透明な内部構造を持っている。この状態になると、Langacker(1987:461)や董秀芳(2002)が主張するように、再分析(reanalysis)により単一の語彙ユニット(mono-morphemic unit)として語彙化される。従って、この状態は、成分構造がそれぞれユニット状態を失ったので、[(S)-[VR]-(O)]又は[(S)-[V’]-(O)]と表記されうる。

このような語彙的なユニットは、他動構文において使役動詞として使役事象をプロファイルする。プロファイルの定着はある程度認められるが、基本的に構文依存である。というのは、語彙ユニットは、[[V][R]]c と同様に、全く同じ語形で様々な項構造構文の述語として機能し、異なるプロファイリングを受け、異なる意味を表現するからである。異なる構文におけるトークン頻度が千差万別であり、特定のプロファイルは特定の語彙ユニットに定着されているとは一概には言い難い。

8. まとめ

[[V][R]]c は行為連鎖を喚起する。喚起された行為連鎖は、[[V][R]]c が述語として他動構文と統合して形成される(S-[[V][R]]c-O)という合成構造で概念的内容として他動構文から事態把握の仕方を押し付けられる(図 3)。(S-[[V][R]]c-O)は、高いタイプ頻度により、[S-[[V][R]]c-O]へと定着度が進む。合成構造のみならず、成分構造の[SVO]と[[V][R]]c も同時に活性化しアクセスされることが可能な状態になる(図 4)。更に、[S-[[V][R]]c-O]と意味の対応が慣習化されると、分析可能性が低下し、成分構造の[SVO]と[[V][R]]c の卓立性も低下し、それぞれの意味貢献が識別できなくなる。この場合、プロファイルは [S-[V]-[R]-O]全体によって担われることになる(図 5)。これは項構造構文の形成である。

この段階において、プロファイルの出所がはっきりと識別しにくくなると、節レベルのプロファイルは、[[V][R]]c のものとして定着される可能性が出てくる。但し、[[V][R]]c へのプロファイルの定着は構造フレームと切り離せないので、非常に限られた程度しか進まないと考えられる。つまり、[(S)-[[V][R]]c-(O)](図 6)という状態である。最後に、[[V][R]]c の事例化表現は、高いトークン頻度により、成分構造間の境界を失い、語彙ユニット[VR]として語彙化される可能性がある。プロファイルの定着はやはり構造フレーム依存である(図 7)。上で述べたことを纏めると、次のようになる。

(S-[[V][R]]c-O) ＞ [S-[[V][R]]c-O] ＞ [S-[V]-[R]-O] ＞ [(S)-[[V][R]]c-(O)] ＞ [(S)-[VR]-(O)]

上図は、分析可能性の変化により、プロファイルの定着パタンが変わりうることを示している。個々の具体的な事例化表現は、トークン頻度の違いにより、この連続体のどこかに存在していることが考えられる。また、同じ事例化表現は、文脈や構造フレームによって成分構造をどの程度活性化するかということも様々に異なる。そのため、同じ[[V][R]]c の事例化表現であっても、「打断樹枝（図 4）」と「打断发言（図 7）」が示すように、上記の連続体上において複数の状態で共時的に存在することが十分に考えられる。

参考文献

Bybee, Joan 2010. *Language, usage and cognition*. Cambridge: Cambridge University Press.

Croft, William 2012 *Verb: Aspect and causal structure.* Oxford University Press.

董秀芳 2002《词汇化:汉语双音节词的衍生和发展》, 四川民族出版社。

Langacker, Ronald W 1987 *Foundations of Cognitive Grammar, Vol. 1: Theoretical Prerequisites.* Stanford: Stanford University Press.

Langacker, Ronald W 1991 *Foundations of Cognitive Grammar, Vol.2: Descriptive Application.* Stanford: Stanford University Press.

Langacker, Ronald W 2000「動的使用依拠モデル」, 坪井栄治郎訳.『認知言語学の発展』, 坂原茂(編) , ひつじ書房。

Langacker, Ronald W 2008 *Cognitive Grammar, A Basic Introduction*. Oxford University Press.

Langacker, Ronald W 2009 Constructions and Constructional Meaning. Vyvyan Evans and Stéphanie Pourcel (eds.), *New Directions in Cognitive Linguistics*, 225-267. Amsterdam and Philadelphia: John Benjamins. Human Cognitive Processing 24.

楊明 2008「動補構造における構文および意味統合」,『人文社会研究』第17号, 千葉大学。

楊明 2013 『結果構文の認知意味論的研究-中・日・英を例に』, 知識産権出版社。

朱德熙 1982 《语法讲义》, 商务出版社。

ようめい・関西学院大学言語教育研究センター

The variability of profile entrenchment pattern in Transitive resultative constructions: the prominence of component structure and analyzability of composition structure

YANG Ming

Abstract

The present paper adopted Usage Based Model proposed by cognitive grammar to describe and analyze the variability of analyzability of V-RP structure due to high usage frequency (type frequency and token frequency) in transitive resultative constructions. Moreover, with the variability of analyzability, the profiling of causative event would receive entrenchment effect at three levels, that is, syntactical level, argument structure constructional level, and lexical level. By different usage frequency, different V-RP structures could show syntactical properties, argument structure constructional properties, and lexical properties. On the other hand, the same V-RP construction could show previously mentioned three properties in different structural frames.